

|||||
近況・随筆
|||||

記録と統計の楽しみ

浅海重夫

記録をつけることは私の趣味の一つである。役にもたたないことを目的もなく記録して楽しんでいる。例えば気温の記録とり。庭に設置した温度計で毎朝毎晩、最低気温と最高気温の記録をとることを始めてから、今年で13年目になる。記録をとる以上は定期的につづけなければ私にとって意味がないので、旅行中は誰かに観測を頼むか、それができない時は東京の公式発表記録（気象庁）をたよりに、旅行の前後何日間かのわが家と東京公式との気温値の差の出方を考慮して、補正するようにしている。自記温度計を使えばよいが、そこまでは凝っていない。

ところで去年の年間気温の推移には、平年のパターンを破る異常な点がみられた。日平均から月平均を算出してわかったことは、1月の月平均気温がその前年の12月の平均気温より高かったことと、7月の平均が6月の平均より低かったことである。過去12年間にそうした現象はなかった。ただしその埋合わせに、2月の平均が1月よりぐっと低く、8月が7月より大幅に高温だったので、この年がとくに暖冬冷夏の年という印象は薄れたかも知れない。そして又今年の1月が去年の12月より高い平均気温を記録した。近年の異常気象ぶりがこの辺にうかがえる。わが家の気温は気象庁に比べて晴天の朝は3～4度低く昼は2～4度高い。天候や季節によってその差がどの位に出るかを確かめるのも楽しみなもの。

通勤や土壌試料採取にくるまを使い出した昭和40年から、走行記録を克明につけている。行先・経路・所要時間・燃料消費など、記録マニアにとって退屈しない材料が豊富にある。燃費率の変動をみると、車種により、運行距離により、季節により、いろいろ差が現われることがわかる。統計処理のし方が難しいので、正確なデータとは云えないが、

中学時代に天体観測に夢中だった頃、小口径の望遠鏡で木星の四大衛星を毎晩測測し、少しづつ変る衛星の位置をスケッチした記録がある。また早朝の薄明の空に水星を見つけ、2週間位追いつづけたこともある。太陽からの離角の小さい水星は、発見するのも難しいと云われるのに、今にして思えば余程昔の東京の空は澄んでいたのだろう。それらの記録は戦中の罹災で失くしてしまった。

毎日つける日記は記録そのものだが、統計をとるには数量化された記録がほしい。時の流れに伴って変動する量的事象は、記録と統計の対象として最も興味深い。個人の生活経験の一部になる消費支出の記録づけは、憶却がらずに習慣化しているので、毎月集計し費目別に経年変化をみることができる。何の目的もなく発表するようなものではないが、ひとつのメリットは無駄使いをしないようになることと思っている。

「10大ニュースにみる戦後40年」という記録書によると、日本人の平均的消費支出の終戦直後（昭和21年）・昭40年・昭60年における費目別支出の増大ぶりや、収入に対する比率の変化などがわかる。この40年間に月収は103倍に、支出は60倍になった。支出のうち米代が5.5倍と僅かであるのは意外に思われる。食品に対する嗜好の多様化からの米ばなれが原因し、それに応じ農家の経営の変貌が起っていることが予想される。国電の初乗区間の運賃は120倍で、40年間の増加率は諸物價の平均をやや越えている。散髪代が260倍、これは人手のかかる業種の傾向を示すといえよう。それらに比べ、国立大学授業料が420倍になったのは驚異的で、年収（恐らく親の収入）の4.9%に達している。昔よりアルバイトのチャンスや稼ぎが多い学生たちであろうが、今年（平成元年度）は又学費の改訂があるという。こればかりは楽しくない記録である。